

## 最先端研究開発支援ワーキングチーム（第3回）議事概要

- 日時 平成21年7月28日（火）13:01～16:01
- 場所 中央合同庁舎第4号館4階 共用第4特別会議室
- 出席者
  - 座長 相澤 益男 総合科学技術会議議員
  - 座長代理 本庶 佑 総合科学技術会議議員
  - 構成員 奥村 直樹 総合科学技術会議議員
  - 同 白石 隆 総合科学技術会議議員
  - 同 今榮 東洋子 総合科学技術会議議員
  - 同 青木 玲子 総合科学技術会議議員
  - 同 金澤 一郎 総合科学技術会議議員、日本学術会議会長
  - 同 有信 睦弘 株式会社東芝顧問
  - 同 石谷 久 東京大学名誉教授
  - 同 勝木 元也 自然科学研究機構理事、独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター副所長
  - 同 川合 眞紀 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授、独立行政法人理化学研究所主任研究員
  - 同 岸 輝雄 独立行政法人物質・材料研究機構顧問
  - 同 中西 友子 東京大学大学院農学生命科学研究科教授
  - 同 中村 道治 株式会社日立製作所取締役
  - 同 西尾 章治郎 大阪大学理事・副学長
  - 同 西島 和三 持田製薬株式会社医薬開発本部専任主事
  - 同 橋本 和仁 東京大学大学院工学系研究科教授
  - 同 松見 芳男 伊藤忠商事株式会社理事・伊藤忠先端技術戦略研究所所長
  - 同 松村 幾敏 新日本石油株式会社代表取締役副社長・執行役員
  - 同 渡邊 浩之 トヨタ自動車株式会社技監

- 議題

- (1) 中心研究者・研究課題の応募状況等について
- (2) 関係団体等からの意見聴取

- 配付資料

- 資料 1 中心研究者・研究課題の応募状況等について
- 資料 2 最先端研究開発支援ワーキングチームスケジュール

● 議事

【相澤座長】

本日は中心研究者・研究課題の応募状況についてまず事務局から説明する。

その後、前回に引き続き、関係団体等からの意見聴取を行う。

(1) 中心研究者・研究課題の応募状況等について

【相澤座長】

議題の1、中心研究者・研究課題の応募状況等について、事務局から説明いただきたい。

【二村参事官】

(資料1及び資料2に基づき、中心研究者・研究課題の応募状況等について概要説明)

【相澤座長】

御質問等あればお願いしたい。

【勝木構成員】

ワーキングチーム会議の最後でよいが、昨日五百数十件の課題が段ボール2箱で届いたが、実際審査を始めてみると、1週間で100件選び出すのは大変な作業。全体の日程については、もう少し配慮願わないと、どんなに頑張ってもできない。このプログラムは非常に素晴らしい施策であり、これにいささかの疑いも持たれないように、きっちりと我々は対応したいと思っている。最後に議論の時間を作っていただきたい。

【相澤座長】

日程について、前回からの変更を事務局から説明いただきたい。

【二村参事官】

日程については、前回資料では、今回の書面審査の期間を27日の月曜日から31日までとなっていたが、構成員からの御指摘を踏まえ、2日間のばして8月2日まで延長。ただし全体スケジュールを延ばすのは困難。従って、その後の重点書面審査以降スケジュールの変更はない。

【相澤座長】

勝木委員の御指摘は、その日程を議論したいということでしょうか。

【勝木構成員】

審査を始めているが、他の構成員から指摘があったように、文庫本100冊読むぐらいの量がある。それに審査という作業が加わるとともに、分野を問わず審査することになっているため100件選ぶのも難しい状況。さらに、専門分野のレビューによるレビューを時間をとって

やらなければ、本当に拙速になるのではないかということ。

【相澤座長】

ただいまの件については、ヒアリングの後で時間が取れば議論いただきたい。

本日は第2の議題として、前回に引き続き関係団体からの意見聴取を行う。本日は大変件数が多いが、初めに独立行政法人科学技術振興機構から意見聴取を行う。

【岸構成員】

その前に時間があれば。8月22日、23日は我々も集まる必要があるのか。

【相澤座長】

事務局から説明していただきたい。

【岸構成員】

予定を既に入れてしまっているが。

【二村参事官】

御指摘の点は、事務局の活動であり、会議を開催するとの趣旨ではない。会議は25日と27日のみ。

【相澤座長】

それでは、これから説明をお願いするが、説明いただく内容は研究領域に関するものであり、研究者個人に関する事項を説明いただくことはできないので、その点御留意いただきたい。

【北澤説明者】

(資料に基づき説明)

【相澤座長】

御質問等あればお願いしたい。

【西島構成員】

大変重要なところを御指摘いただいたと思う。資料の1ページ目の二つの危機への科学技術の対応は出口を見据えるべきという御意見だと思うが、他方、将来の日本や夢が持てる技術というのは出口をはっきり描けないものであり、ある意味では相反するのではないか。

また、産学官連携という言葉があったが、例えば一つのテーマに関して産学官がバランスよく協調する世界をイメージしているのか。あるいはあるテーマは産業界がリードし、あるテーマは学が先導するというケースを考えているか。出口が見えているものであれば、産業界が単独で行う方が効率がいいのではないかと思うが、その辺とのバランスはどう考えているのか。

【北澤説明者】

例えば太陽光エネルギーの応用といったようなことを考えたときに、これは光合成メカニズムの完全解明から、現在の太陽電池の効率をさらにもう10%上げたいというようなところまで非常に総合的であり、場合によっては全世界を巻き込むような形での夢プロジェクトを子供たちに向けても日本の取組みを発信できるのではないかという意味。

iPS細胞もそういう面あり、大学の努力により既に産業界の100社以上が私たちのプロジェクトにも参画したいと言っており、夢プロジェクトというのはあり得るのではないかと思っている。

【西島構成員】

逆に言うと、そういうものを多く選んでほしいというメッセージと受け取ってよいか。

【北澤説明者】

幾つかはそういうものが欲しいということ。

【橋本構成員】

資料の後ろに列記されているプログラムで丸が付してあるものは、現在までJSTが実施してきたプロジェクトであって、資料の最初に記載された戦略との関係が余りないような気がする。どういう観点でこれを見たらいいのか。後ろに列記されているプログラムは日本が強い分野を表にしているという感じがする。資料の最初にある国としての戦略の部分との関係が希薄なような気がするが。

【北澤説明者】

後ろの分野選びは何が重要かということで選んでいる。その中で、JSTの研究開発において研究者が実際に実施しているものに丸を付している。丸の付したものを中心に集めたわけではない。

【橋本構成員】

最初は私もそうかと思って見ていたが、例えば産業シーズの創出ということを言えば、何でもある意味該当するだろう。将来日本が国としてどういうところに力を入れるべきかという観点で選んでいないのではないか。

【北澤説明者】

その意味では、産業シーズの創出は橋本委員の言われるとおり。産業シーズの創出においては、JSTはどちらかという強い分野をより強くしたいと考えているため、JSTに関連する強い分野に丸を付している面がある。

【西尾構成員】

現在JSTでは、例えばERATOなどの大型プロジェクトが進行しており、その中で最終

段階近くに来ているものもあると思う。ところが、今回のこのスキームのもとで、ERATOからこちらに移ってしまうプロジェクトが出てくる可能性がある。それに関して、理事長として何かメッセージをいただけるとありがたい。

**【北澤説明者】**

このことは、我々の中でも激しい議論があった。最終的な結論は、内閣府のプロジェクトになるべく多くの人を送り込むのがJSTとして最大の功績であり、喜んで送り出すということ。我々は次の弾込めができるのではないかということで、また新しい旅に出ようというのが我々の最終的な結論である。

**【有信構成員】**

先ほどの質問にも関連するが、例えば4ページに産業シーズの創出にかかわる研究テーマの例が挙げられているが、産業化されるためには、単一のシーズだけではできないことはよく御存じかと思う。

さらに、今回の研究費は30億から150億であるため、1年でこの150億を回収しようとする、利益率10%で考えても、1,500億程度の売上規模が必要。したがって、資料に記載された研究テーマが出口につながったとしても、直接的にすぐ産業化されるわけではない。このことは、よく自覚しておく必要があると思う。ここで挙げられたテーマは、そういうことを考えて、最終的にはこの中のシーズが幾つか融合することによって、新しい大きな産業につながるということを一応見据えているのか。

**【北澤説明者】**

その点からすれば、4ページの9、10、11、12、13は十分にその可能性があると考えている。14番は、まだどのように芽が出ていくかわからないという状況であるが、学問的に日本が大きくリードしている。15番は、十分その可能性があると考えて提案している。16番は未知数だが、こういう分野がどうしても必要ということ。

**【相澤座長】**

JSTからの御説明は以上とさせていただきます。次は独立行政法人日本学術振興会からの意見聴取を行う。

**【小野説明者】**

日本学術振興会の理事長の小野です。最初に、最先端研究開発支援プログラムのような予算の単年度主義の壁を破り、5年間にわたって研究を支援するという従来にない新しい制度をつくっていただいたことに心から御礼申し上げたい。このプログラムは基金を設置し、5年間にわたって支援するという画期的な新しい制度。しかもできるだけ研究者に使い勝手のよい仕組みをつくらうというものであり、また、2,700億という非常に大きな予算を伴うもの。それだけに、大学や企業の研究者の関心は非常に高く、国民やマスコミも注目している。また、外国のファンディングエージェンシーも今回の制度に強い関心を示しており、その意味では審

査に当たってできるだけ透明性、客観性を確保し、公正かつ慎重な審査が行われるということが各方面から求められているというふうに思っている。

このような観点から申し上げますと、今回の審査日程は非常に窮屈である。他の大型の競争的資金と比較しても無理があるように思う。日本学術振興会は、基金を管理する立場にある。5年後に基金からの支出が適正であったかどうかについて、責任を問われる立場にある。国民の税金であり、また金額が大きいだけに、その成果の厳しい検証が求められるというふうに思っている。ぜひとも十分な審議を尽くして、適切な研究者と課題を選定していただきたいと思っている。特に当初基金の法律におきましては、現下の厳しい経済情勢に対処するためという文言が入っていたが、これは国会の修正で削除されている。これは国会における修正であって、経済対策という観点から、何が何でも早急に結論を出さなければならないという状況ではないはずである。後になって拙速であったとか、審査がずさんであったといったような批判を招かないためにも、日程等についてぜひ再検討をいただきたいと思っている。これは基金の管理責任者としてのお願い。

また、日本学術振興会は平成13年から学術システム研究センターを設置しており、人文、社会、自然科学のすべての分野をカバーする110名以上の最先端で活躍している第一級の研究者を集めている。大学や研究科の研究機関との併任であるが、現在の我が国の学術研究の状況について、幅広く理解し、情報も集めている。その観点から、今日はセンターの黒木副所長から、今後重視すべき研究領域について説明させていただきたい。

**【黒木説明者】**

(資料に基づき説明)

**【相澤座長】**

それでは、ただいまの説明に対して質問等があればお願いしたい。

**【岸構成員】**

よくまとめていただいたと思う。ただ、最後のところに関係することであるが、採用件数の問題というのが非常に大きいと思う。それから、文科省に対して質問したが、お金がかからない数学は今回のプログラムでは不要であるとはっきり明言されていた。ここでは数学が入っているが、それが全体としてどういう扱いになっているのか。それから、エレクトロニクスなどの分野では、JSPSとJSTがどういう役割になっているのか。

**【小野説明者】**

2点目のJSTとJSPSの仕分けだが、基本的にはいわゆるトップダウン型のものがJSTで、研究者の自由な意思に基づく研究をサポートするというのが私どもJSPSの使命だと思っている。ただ、基礎研究の中にはどうしてもある程度オーバーラップする部分もあり、そこはJSTと相談しながら、できるだけきちんと仕分けしようと思っている。

**【黒木説明者】**

数字について申し上げますと、数学はお金がかからないというのはある面で事実。しかし数学は工学、物理の基本的な部分を占めており、数学がきちんと進歩するというのは非常に重要なこと。それから、非常に高性能の新しいコンピュータをつくるということは、とんでもないお金がかかる分野。このため、数学を一様に言うことはなかなか難しいが、重要性というものは間違いないと思っている。

**【岸構成員】**

60件にすべきということは非常に大事なところであるが、既に30件という採択件数は決まっていると考えている。この辺の真意をお聞きしたい。

**【黒木説明者】**

理解が間違っていたら申しわけないが、今までのいろいろな発表を聞いていると、30件ということがひとり歩きしているような感じがしている。しかし、学問の重要性、幅の広さ、多様性ということを考えると、30件ではなく60件、あるいは思い切って90件とっていただくということが我が国の科学にとって非常に大きなインパクトを与えると思う。資金を集中すれば、そこだけが進歩するというわけではなく、やはり広い基盤の上に科学というものは進歩するものだと信じている。

**【渡邊構成員】**

今の話に関連するが、国民に実感できるものとしてこのプロジェクトは始まっていると思っている。小さな単位にばらばらにすれば、成果が得にくいのではないか。自然科学でもいろいろな分野を束ねて、あるいは前回も議論があったが、社会科学等々も加えて、出口に向かって大きく融合し、まとめていくというようなものでないと国民が実感できるプロジェクトにはならないと思う。よって、余り単品のなものにこのお金を使うというのは、私はいかがなものかと思っている。

**【西島構成員】**

私も同じ意見。これは公募を始める前に議論すべきことであって、今既に公募が終わる段階。応募者の中には、多くのリスクを背負って一本化してきている人と、とりあえず出した人がおり、後者の人が60件の中に運よく入ってしまったというようなことは望ましくない。ぶれることなく30に絞ったほうがいいと思う。

**【相澤座長】**

それでは、学術振興会からの御意見は以上とさせていただきます。次は農林水産省から。

**【佐々木説明者】**

(資料に基づき説明。)

**【相澤座長】**

それでは、ただいまの説明に対して質問等があればお願いしたい。

**【石谷構成員】**

参考3へ関心があるため伺うが、バイオマスの利活用というのは、今後の低炭素化には非常に重要だという位置づけはよく理解できる。しかし、日本のバイオマスを考える場合には、この技術もさることながら、バイオマスをいかにして集めるか等、システムの話やそのための技術が欠けている議論も多い。そういう方面は対象に考えていないのか。また、対象は日本だけでなく、世界全体を広く考えているのか。それから、参考4で突然海洋環境リアルタイムモニタリングシステムが出ているが、資料の左側との関係がよくわかりかねるので説明いただきたい。

**【佐々木説明者】**

まず、バイオマスシステムの話であるが、これは御指摘のとおり、日本で広く、薄く賦存しているバイオマス、これを集めるということは極めて大きな課題。もちろん工場まで持ってきての研究というのは進んでいるが、それとあわせて収集コストの低減化、効率的な全体システムの構築もあわせてやっていかなければならないと認識している。

それから、世界と日本の話であるが、基本的に日本の農林水産業を考えている。もちろん世界のことを忘れていいということではないが、立脚点は我が国の農林水産業、あるいは地域、農山漁村というところに賦存するものを効率的に利用していくというふうに考えている。

**【農林水産省】**

水産の施策としては、基本的には食料の持続的な生産と安心・安全な水産物の供給が重要な課題であり、その中で1つは環境を考えながら食料生産を考えていくということ。資源管理なり養殖生産なりを積極的に推進していくという中、最近ではゲノム解析が急速に進歩しつつあって、海洋中の水とか海洋中の底泥等環境の健全指標を新たにメタゲノム解析により解析し、環境指標の策定することを考えている。さらに船やブイによって自動的に観測するシステムをつくり、環境を健全に維持しながら、食料生産を図っていく。

**【中西構成員】**

非常に魅力的なプロジェクトが書かれていると思うが、最初におっしゃったように食というのは私たちが生きていくための基本であり、非常に大切なこと。食料の問題は安定に量を確保することが一番大切だと思うが、1次産業、漁業、それから農業の現場の技術革新は特に書かれていない。このことは他で考えるということか。

**【佐々木説明者】**

今御指摘のありましたことは農林水産省の本分と心得ている。例えば、現在、水田のフル活用のような、米だけでなく、自給率の低い麦や大豆なんかも効率的に生産していくための地下かんがいシステムの研究等も行っている。ただ、これは私どもの本分であって、私どもがみずからやっていくというような位置づけ。研究の萌芽を利用して他分野との融合により産業化を

図するという観点から示しているもの。当然のことながら、食の安定供給の本論としての位置づけは極めて重要だというふうに認識している。

#### 【松見構成員】

エレクトロニクス、創薬、あるいはエネルギー技術などと比べますと、若干目立たない分野ではあるが、極めて重要だというのは御指摘のとおり。今回のプログラムではやはり日本が世界をリードできるかどうかということも重要な視点というふうに理解しており、そういう意味ではおっしゃった分野はかなり欧米との競争が激しいというか、欧米の追い上げが激しい。例えば、機能的食品、生物遺伝資源は欧米勢が活発に進めている。こういうことを勘案し、世界トップレベルに持っていけると、農林水産省が期待できる分野が特にあるかどうかお聞きしたい。

#### 【佐々木説明者】

資料中の4領域は、それぞれ日本が引っ張っていけるという期待のもとにお示しをしている。最初の例では、イネゲノムの完全解読というのは日本が完全にリードしており、その後のインフォマティクスも含めてリードしている分野と考えている。

それから、下の動物、あるいは昆虫の分野でもカイコを中心として日本がリードしている分野と考えている。もちろんバイオマス利活用についても、個別技術についてはかなり研究は進んだスタッフが国内にいるというふうにとらえている。最後もそうであり、それぞれそうしたことを想定しつつここに出させていただいた。

#### 【相澤座長】

特段ないようなので、以上とさせていただきます。次は総務省からの意見聴取を行う。

#### 【河内説明者】

(資料に基づき説明)

#### 【相澤座長】

それでは、ただいまの説明に対して質問等があればお願いしたい。

#### 【有信構成員】

ICTについては、非常に重要な技術だと認識しており、将来の産業の基盤になるものという理解でいる。1点だけ注意しておくべきだと思うのは、非常に大きな売上高が想定されているが、この売上高を実現するために必要な基礎的な研究に係る費用は、売上高の大体1%ぐらだと想定したほうがいい。したがって、その1%を想定したときに、今の研究規模が果たしてそれで十分かどうかという勘定になるわけであるから、それが不十分であるとかかなり将来的に厳しいことになる。これは一般論であり、そういう観点でも見るべきだと思う。

それから、1つ具体的な質問だが、オール光通信のところで光のトラフィックがどんどん大きくなるというのは全くそのとおりだと思うが、処理側の話が述べられていない。つまりトラ

フィックは非常に高速になって、大容量が送られるようになる。そのための技術開発は行われる。しかし、そのトラフィックを処理する側の速度が追いついていかなければ、それこそ高速道路があっても、そこを走っている車がほとんどいない状況になってしまう。そこもあわせて全体のスコープに入れておく必要があるが、この辺についてはどう考えているのか。

【河内説明者】

最初のほうの基礎技術についての重要性ということは、私どもも全くそうだと思うている。特に最近民間の企業の研究開発部分がどうしても応用の側、即物的なところにおいてしまいがちであり、国の予算を使う研究開発については、この部分についてもしっかりと目配りしていきたいと思っている。それから、光の処理側の部分についての重要性も全くそのとおりである。これを進める上でも、処理側を含めた全体としての高速化、省エネルギー化ということを進めていきたいと考えている。

【石谷構成員】

単純な質問だが、技術的なところは5ページに幾つかの項目を挙げており、その後3点例が挙げられているが、これはその中で優先順位の高いものと理解したらよいのか。

【河内説明者】

優先順位が高いというと、ほかのものの優先順位が低いということになり適切ではないかもしれないが、挙げている項目自身は極めて重要なもの。この3点については、その中でもさらに重要であるというふうに考えている。したがって、優先順位としては高いということ。

【石谷構成員】

そうすると3つ目について、今質問のあったようなことも重要かと思うが、その点についていかがか。

【河内説明者】

処理側も含めて重要だと考えている。

【中西構成員】

I C T技術は非常に必要な大切な技術だと思うが、5ページを見るとセキュアなネットワーク構築というのが外出しになっている。例えばコンピュータを使っていると、毎日のように悪意を持ったメールがたくさん来ており、それを何か当然のここのように受け取るような毎日になっているのは変だなと思う。よって、いろいろな技術が先行する研究開発だと思うので、それに追いついていくようにセキュアなネットワークとかセキュリティについて、一つ一つ入り込んだものを狙っていると理解してよいか。

【河内説明者】

おっしゃるとおりであり、それぞれの技術の中でセキュリティというのはしっかり裏打ちさ

れている必要があると思う。ここに特に掲げているのは、このセキュアな技術について、集中的にこのプログラムの中でブレイクスルーを図りたいため。

**【渡邊構成員】**

私もICTの技術というのは大変重要だというふうに思っている。特に国民の安心・安全にかかわる世の中の革新技術は、ここからかなり出てくるのではないかと思っている。そういう意味では、5ページにその記述がないのは少し残念。意見を少し伺いたいが、今回のこのプロジェクトの大きなねらいは、いろいろなものを融合して出口に持っていくということだと思う。4ページに米国のやり方が書いているが、省庁横断的などというふうな見出になっている。総務省も日ごろから省庁連携というのはいろいろ行っていると思うが、こういうプロジェクトを機に、さらに何か努力をするつもりはあるのか。

**【河内説明者】**

まず、5ページのところで、安心・安全が抜けており失礼した。非常に重要だと思っている。それから、こういった分野について、非常に融合的、あるいはすそ野の広い分野であるということは御指摘のとおりであり、私どもこれを進める上で情報通信の一部のみならず、全体的な視点で総合科学技術会議等の御指導も得ながら、あるいはこのワーキンググループの皆様方の御指導も得ながら、各省、経産省その他とも連携して、この技術開発が展開できるようにしていきたいと思っている。そういう意味では、総合科学技術会議、IT戦略本部等とより緊密に連携してこのプロジェクト等を進めていきたいと思っている。

**【渡邊構成員】**

期待している。

**【西尾構成員】**

最後に1点だけ確認。光通信のことだが、通信速度のことも大切であるが、むしろ省エネであるとか、エネルギーをいかに減らすかというところがより重要と考えてよいか。

**【河内説明者】**

時間の関係で省略させていただいたが、8ページに消費電力量が1.3倍になるということで、これをどう抑えるか、あるいは先ほど説明したように、熱で光ファイバーが溶けてしまう熔融問題、こういうところについては、光化の中でしっかりと解決していきたい。

**【相澤座長】**

それでは、以上とさせていただきます。次に、環境省からの意見聴取を行う。

**【秦説明者】**

(資料に基づき説明)

【相澤座長】

それでは、ただいまの説明に対して質問等があればお願いしたい。

【本庶座長代理】

2点、技術的なことを伺いたい。核融合というのが2050年のところに入っているが、これの実現性に関してどのような見解を持っているのか。それから、最後のところに斬新なシミュレーションモデルの構築ということがあるが、気象のデータ、つまり何が影響を与えるのかということの理解が不十分な段階で幾ら高度なシミュレーションをやっても、甚だ難しいのではないかと。もう少し地道なデータ分析が必要ではないかと思うがどうお考えか。

【秦説明者】

核融合については、環境省で中心的に研究をしている分野ではないので確たることは申し上げられないが、非常に難しいものであるとは承知をしている。それから、2点目のシミュレーションモデルのほうは、御指摘のとおり両面あると思っており、シミュレーションモデルを高度化していくということもさることながら、データ分析の手法もしっかりやっていかなければ確たるものにはなっていないと思っている。両面での研究開発というのが重要だと認識をしている。

【松見構成員】

今の本庶先生の御質問とも絡むが、やはり地球温暖化への対応としては、この気候システム研究は極めて重要だと思うが、今のシミュレーションモデルも含めて、幾つかの大学で行われている日本の環境変動、あるいは気候システム研究のレベルは世界でどのくらいのポジションにあるのか教えていただきたい。

【秦説明者】

それについては余り詳しくないため、正確には申し上げられないが、データの集積という意味ではGOSATという衛星を打ち上げて、かなり良いデータがとれる状況もだんだん整ってきており、そういった意味では相当なレベルに達しているのではないのかと思っている。

【石谷構成員】

ただいまの質問の件は、恐らくアメリカと日本とヨーロッパで1カ所有名なのがあり、私の信じている限りでは相変わらずワン・オブ・スリーのトップにいると思う。先ほどの質問にもあったが、こういう地球環境問題というのは、日本だけではなかなかできかねると思うが、もう少し組織的に国際研究の主導権をとるとか、そういうお考えは何かお持ちか。

【秦説明者】

御指摘のことは非常に重要だと思っている。地球環境の問題というのは、一つの国だけで対応できるような問題では到底なく、当然ながら国際的な協力体制が重要だと思うし、分野によっては我が国がリーダーシップを発揮してやっていくべきものもたくさんあると思っている。

【西尾構成員】

今の質問と関連してであるが、先ほど日本は確かに環境とかエネルギーに関して、技術的にはリーダーシップをとっていると言いながら、やはり最近の米国などの莫大な予算を投じたいろいろな施策を考えると、今後、日本がこれらの分野を継続的に強力で押し進めないと遅れをとってしまう懸念が十分あると思う。そういう意味で、今お話のあったように、これらの分野の技術に関して、国際的な標準化を主導することをはじめとした国際競争力の観点からのリーダーシップの発揮というようなことを是非考えていただきたい。

【秦説明者】

最後のスライドの左下に、競争条件整備や国際基準づくりへの積極的な関与ということに記載させていただいているが、まさに御指摘のとおり国際基準づくりについて積極的に日本が出ていくことも非常に重要だと認識をしている。

【相澤座長】

環境省からの説明は以上とさせていただく。次に、厚生労働省からの意見聴取を行う。

【谷口説明者】

(資料に基づき説明)

【相澤座長】

それでは、ただいまの説明に対して質問等があればお願いしたい。

【西島構成員】

厚生労働省の書かれている背景は総花的にわかったつもりだが、最近最先端研究開発支援に対して、国民のほうからどういふようなことをやってほしいかというアンケート結果が出てプレスリリースされていると思う。600人ぐらいから、大体900、1,000件集まって、その中でパーセンテージ的に医療とかで、具体的にこういうところをやってほしいという意見があったと思うが、それを踏まえ、どこをどういふふうに最先端でやってほしいという感想があれば聞かせてほしいというのが1点。

もう1点は、簡単に再生医療とかというのがずっと書いてあるが、最先端研究の中で見ると文部科学省、経産も含めて最先端、特にiPS研究というのはブーム的というか、非常にトピックで出ましたので、そういった公募も多分出てくる可能性があると思う。ES、iPSを含んだ、いわゆる幹細胞を含めたものについての厚生労働省の立つ位置、例えば文部科学省が出した最近のiPS研究のロードマップが出ており、その後ろのほうには明らかに厚生労働省が十分承知して、意見交換していくべきものがあるが、その部分についてはどの程度厚生労働省は認知しているか、意見交換を行っているかというこの2点についてお願いしたい。

【谷口説明者】

まず、1点目、最先端医療のアンケートのことだが、最先端といってもさまざまな分野の最先端医療がある。基本的に私どもとしては、最先端医療というのは、研究の成果を国民の皆様に還元するという考え方をまず持たなくてはいけないと考えている。その場合に技術そのものが本当に国民の利益になるかどうかということの部分が分野によってはかなり危ない面がある。その点についての見きわめをはっきりした上で、医療なり福祉も含めて、施策に生かしていかなくてはいけないため、その辺は、総合科学技術会議の御意見もいただきながら進めていく必要がある。

**【西島構成員】**

私が言っているのは、アンケート結果を踏まえてどうお考えかということ。

**【谷口説明者】**

国民の皆様方からは、さまざまな御意見をいただいていると思う。それを一括してこれを進めるということはなかなか難しいのではないかと考えている。

**【西島構成員】**

アンケート結果については公表されているが見られているか。

**【谷口説明者】**

さっとは見ている。

**【西島構成員】**

2点目のほうで、例えば文部科学省のiPS細胞研究のロードマップについて、3省の共同体制はどういうふうにお考えか。

**【谷口説明者】**

私の知る限りではあるが、文科省のロードマップについてはまだ協議等は行っていない。今後必要があれば、進めてまいりたい。

**【西島構成員】**

ぜひそういうところは進めておいていただきたい。そういうものを踏まえて最先端研究を整えていかなければならないと思っている。

**【石谷構成員】**

非常に簡単なことで2つ伺いたい。今資料を拝見したところ、薬と医療に関する申請が多いが、一つ一つは今御説明があったようにどれもこれも大事だと思ってしまう。ただ、逆に言えば、こういう最先端の研究支援というものはたまたま出てきたようなプログラムであって、それに頼ってこういうようなことが起きるといえるのは、私は非常にちょっと理解しがたいところ。こういうものがあってもなくてもやるべきことではないか。ただ、こうやって出てくるという

ことは、ふだんから足りないからこういうところで選択しなければ非常に危ないということか。それから、最先端研究支援のテーマとしては、何か共通的なものがあるのかどうか、もしあるとしたらどんなものがあるかを簡単に説明いただきたい。

**【谷口説明者】**

申しわけないが、今回こちらのほうに出されたものを見たわけではない。どういうものが本当に出てきているのかというのは、掌握していないので、先生がおっしゃったような部分について、そもそもこれまでやってこなかったのかというふうなことについては、ちょっと今お答えしかねる部分がある。

ただ、我々としては先ほどの説明で申し上げたように、できるだけ幅広いところから拾っていくという意味で、いろいろなところで研究者の方々の御支援をしてきたつもりである。それで却って研究が細分し過ぎて小さくなっていると言われたことも若干あるが、そういった意味ではまとまった研究が今回できるという意味で、期待されていた先生方がどんと出してこれたのではないか。それから2点目は何であったか。

**【石谷構成員】**

何か最先端研究として、一括りに括ったようなもので重要なものがあつたら教えていただきたい。

**【谷口説明者】**

それは理念的に答えざるを得ないようなところがあるが、3ページ以降こういうふうな形でまとめさせていただいている。こういう理念的に大括りになっている研究で、社会的に非常に貢献するようなものが先生方の御判断の中であるとすれば、ぜひこういう大括りの理念の中で選んでいただければというのが私どもの希望である。

**【相澤座長】**

厚労省からの説明は以上とさせていただく。次は国土交通省からの意見聴取を行う。

**【藤田説明者】**

(資料に基づき説明)

**【相澤座長】**

それでは、ただいまの説明に対して質問等があればお願いしたい。

**【渡邊構成員】**

安全・安心に向けて、国民が実感できる取組がいろいろ書かれているが、1つ質問したい。4ページ目に交通事故のない社会を実現するということが書いてある。交通事故というのは、当然、車自身が安全技術を向上させなければならない。あるいは1970年代、日本がやったようにインフラを整備する、歩道と車道を分離する、あるいは交通信号の設置をふやす。現在

でいいますと、先ほど話のあった I T S で予防安全の領域を拡大していく。さらに言えば、従来の技術であるが、例えばヨーロッパでは、公園の中に入っていくときにバンプがある。速度を落とすための突起のこと。それから、住宅地に入るところにも、そういうものがある。こういう技術開発というのは、普遍的な開発も必要なわけだが、4 ページに書いてあるような事故解析が不可欠だと思う。地道にやる必要があると。そういう取組について、国土交通省はどういうふうにお考えか。

**【藤田説明者】**

御指摘いただいたようなことで、一生懸命、交通安全環境研究所という独法で、具体的な交通事故の解析について地道にやっている。それを具体的に現場に適用するべく、これは研究開発の部門じゃなくて、具体的な施設の整備に際しても適用していくということだろうと思う。私どもは、あくまでも具体的な社会資本の整備を進めておりますから、この基本計画は第三者に利用してもらうための基本計画じゃなくて、私どもの社会資本整備の進め方そのものにも不断に採用させていただいているということで、御理解いただきたいと思う。

**【渡邊構成員】**

私の質問の仕方が少し足らなかったと思うが、要するに、先端の研究と地道なそういうものを合体させないと、交通事故を具体的に減らしていくのは難しいのではないかなと考えている。

**【藤田説明者】**

貴重な御指摘だと思う。それを踏まえて対応していきたいと思う。

**【相澤座長】**

特段無いようなので、国土交通省からの御説明は以上とさせていただく。それでは、最後になるが、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（N E D O）から意見聴取を行う。

**【N E D O】**

（資料に基づき説明）

**【相澤座長】**

ただいまの説明に対して質問等があればお願いしたい。

**【橋本構成員】**

このプログラムの目的自身が、N E D O のふだんやっていることとぴったり一致しているようなものであるから、提案されていることはまさに国の産業、通用するものはどういうものかということで大変わかりやすい。しかし、御指摘にもあったように、それゆえに、実際には N E D O が今やっていることと非常に一致している。だから、すべてのものは既存のプロジェクトが走っているわけで、こういうものが選ばれたときに、どのように N E D O として考えるのか。2 つのケースがあるが、1 つは、既に走っているプロジェクトの方が採用された場合と、

それから、そうではない方が採用されたけれども同じ分野である場合、それらについてどのようにお考えになるのか。先ほど、実は同じような立場のJSTの場合は、次にどこの分野をやるのか動くことによって新たに予算の使い道があるため、そういう考え方をしているのだという説明があったが、NEDOの場合はどのように整理されるか。

#### 【NEDO】

先ほど7ページで御説明させていただいたように、このワーキングチームでどういうふうに御判断されるかわからないが、我々はここに「協調と役割分担」というふうに書いている。先生がもし同じなら、一体的に運営すべきじゃないかというふうに考えているし、先生がもし異なるのであれば、そこはどう協調していくかが重要。技術開発自身は、日本国のためにやっているものであるから、相互の成果を持ち寄って強い産業をつくっていくということが、私どもは不可欠じゃないかというふうに考えている。もちろん、このプロジェクトチームでどういう方針をお決めになるかによるが、私どもはそう考えている。

#### 【松見構成員】

簡単に2点。1つは、日本が強い産業においては、民間がどんどん研究開発あるいは投資をするのではないかと思う。したがって、日本は弱いけれども、日本にとって重要であり、かつ、強化していく必要があるという分野を今回のようなプログラムを通じて強力に支援するというふうな考え方をすべきという面もある。この点、具体的でなくても、こういうふうなことをお考えかどうかというのが第1の質問。

第2の質問は太陽光発電であるが、これは我々も民間にいて非常に気になっていることは、あれほど強かったシャープがあつという間にドイツのQ. CELLSに世界一のポジションをとられてしまったこと。もちろん理由はいろいろあって、電力買い取りを含めてドイツ政府が支援措置を出したことが大きな理由だとよく言われるが、例えば日本の太陽光発電分野において技術開発力は本当に強いのかすごく不安がある。このことについてお考えをお聞きしたい。

#### 【NEDO】

30プロジェクトについて、強いところは民間がやるので弱いところを強くすべきだという意見ももちろんあると思うが、現在、景気が非常に悪くなって、民間企業の調査におきましても、究開発投資が減っているところが非常に数多くなっている。したがって、景気対策の一環としてここで民間企業の強いところにさらに強くするようなカンフル剤を打っていくということが、政府としても強いメッセージになるんじゃないかなというふうに考えている。それから、太陽光については、先生がおっしゃたように、いろいろな要件があつてシャープが4位になっている。ただ、シャープについても、堺で大工場をつくっており、近々動くと思うが、技術開発能力につきましては、ドイツの会社、中国の会社が、製造装置を持ってきてボタンを押してつくっているというのに比べ、今後の成長性は非常に高いものだというふうに私自身も思っているし、太陽光関係者もそう確信している。

#### 【渡邊構成員】

私も、NEDOの仕事は今回のプロジェクトの仕組みの先行例のような気がする。7ページにある「マネジメント能力」のところに書いてあるように、「産学官の研究者の連携・融合」を図ることが大切。中心研究者は必要だと思うが、この中心研究者をサポートしていく国の仕組みみたいなものも必要ではないかなと思う。これについてどうお考えなのか。それから、前のページにちょうど30項目ある。御同慶の至りであるが、

例えばCO<sub>2</sub>の固定化と水素エネルギーのつくり方、安価でCO<sub>2</sub>の発生の少ない水素のつくり方、こういうものは融合してやるべき。そういうテーマの融合というものについては、NEDOはどのようなふうに進められているのか。

#### 【NEDO】

まず、1点目については、中心研究者のマネジメント能力、これはもう必須条件であると考えているが、先ほど申し上げたように、私どもで蓄電池を見ても93機関から多数の方々が来てチームをつくっているのだから、それをサポートする機関も不可欠だと思っている。今回の支援プロジェクトについては、そこもコアの一つ。中心研究者に雑用をさせないでそのマネジメントもよくやっていく、サポートするところが非常に大事だというふうに承知している。私どもも全く同じ考え方で、必要なれば私どもも支援機関の一つになっていきたいと考えている。

それから2つ目は、構成員がおっしゃったように、分野が違うところ、部が違うものをいかにくっつけるかというのは、非常に難しいやり方である。私どもの中では、現在、部が15ぐらいあるが、その上に各理事が三、四の担当を持っており、その理事の下で隣の部、あるいは違う部の調整・融合を図っている。例えばナノ技術でいえば、ナノはどこに使われるかということ、エネルギー、環境、電子材料、バイオにも使われるわけであり、そういうふうなところに対応していかないと、日本の技術優位性を今後とも確保していくというのは非常に難しくなるのではないかということで、理事長も常に口うるさく言っている。我々も肝に銘じて、その融合をどうしていくかというようなことを進めている。ちなみに、先ほど6ページの8番に「融合戦略領域」などということを書いてあるが、こういうふうなところにも少し書いて、その意識を、職員含めて対応してきているという状況である。

#### 【相澤座長】

それでは、ただいまのNEDOからの意見聴取につきましては以上とさせていただきます。

#### 【相澤座長】

ここで休憩をとりたいところではあるが、既にかかなりの時間を要しているのだから、このまま最後のまとめをさせていただきたい。前回、それから今回と引き続き、関係諸団体からいろいろと御意見を伺った。この御意見を伺う趣旨は、あくまでも構成員の皆様がこれから選考されるに当たり、関連諸団体の観点から重要と考えられる領域ということで御意見を述べていただいたというもの。このため、ワーキングチームとして、こういうところが重要だという結論を引き出すということはない。皆様方が個人個人でこれからの判断材料に使っていただければと思う。それを踏まえ、これまでの意見聴取を通じて、何か御質問いただくようなこと、あるいはお気づきの点があればここで意見交換をさせていただきたい。

**【石谷構成員】**

意見交換というよりも、個人的なお願いというか問題提起というか、先ほども申し上げたように、私はある分野はある程度わかるが、分野によっては非常に素人であり、一つ一つは非常に重要だと思うが余りにも細か過ぎる。これを省いてよいのか、それとも採択すべきなのか、その判断すら非常に迷っており、時間があれば十分周りに調査することもできるかと思うが、この時間では1件につき、10分でやっても間に合わないぐらいになる。そうなると、むしろ棄権するのが最も公平なのかなという感じも持っているが、その辺についてはいかがか。

**【相澤座長】**

これは、どちらにしても大変難しい御判断だと思うので、一律にこういう方針でということにするのは、当初議論したがやはり難しいと考えられる。個人個人の御判断で棄権というか、ここについては意見を述べないということを決めていただき、その旨を記載していただくということにさせていただきたい。それから、評点の取り扱いだが、判断を下された構成員数で割って出すというような取り扱いにさせていただければ。

**【石谷構成員】**

まさにその点を考えており、それであればいわば平均値を投票したことになるため最もフェアかと思う。

**【相澤座長】**

それでは、そのような取り扱いにさせていただく。

**【西島構成員】**

先ほど日程のことが出たが、600件をぱっと見たところ、明らかに30億円使うようなプロジェクトでないのも幾つか見当たるし、それから重複していてカットできる部分もある。これは正直に言って、1週間延ばしたからどれだけ精密にやれるんだと言われれば、その増えた1週間がタイトになるだけで、精度が上がるというものではない。これはもうこういうふうなタイトな日程の中で、まずは1次選抜で600から100を選ぶということで、このまま押し切っていただきたいと思う。変に日程をいじられると、後ろのほうの日程がかなり詰まっているので、当初の計画で進めていただきたい。

もう一つは、本当に可能性のある最先端の提案というのは、たとえ異分野の構成員に対しても、やはり「これはおもしろいな」という印象を感じさせるものがあると思う。それが100に選ばれないというのは、しょせんその程度の提案というふうに、私は割り切っている。

**【中西構成員】**

私も2時間かけて20件終わったが、何が一番大変かというのと、コメントを書くのが大変。なぜかというのと、やはりある程度のレベルのものであるから、これを選択しない理由をいわばあら探しのように探していくわけであるが、それを読み込むのが非常に大変で時間がとられる。

もしできたら、「市場化が見えない」とか何か理由があって、それを選べばよいとか、何かその理由を書くところを少し簡単にさせていただければ時間の節約になるのではないかと思う。

**【相澤座長】**

なるほど。これは事務局への質問だが、その後のプロセスに残さないと判断したところについてのコメントは、このタイムスケジュールの段階で必ず伴っていなければいけないというような状況かどうか。その辺の事務局の判断は。

**【二村参事官】**

最終的に選ばないものについては、採択されなかったという理由を応募者に返すという段階で、その理由が必要になってくる。それを出すのはこの30課題が決まったところと同じようなタイミングになると思うが、理由を改めて書いていただくというのは、その段階で書いていただかないと、後で思い出して書くというのも、それはそれで大変ではないかなと事務局は思っている。事務的な都合を申しあげれば、それは今回選んでいただくのと同時に選ばないという理由を書いていただくというのは、一緒になくても多少ずれても、それは事務局としては対応可能だと考えている。

**【中西構成員】**

それから、次の段階で300件に対してまた細かく書くわけで、かなりオーバーラップするようにも思えるが。

**【相澤座長】**

確かに実際のプロセスとしては、そこは大変。ただいまのようないろいろな条件はあるが、幾つかの工夫はできるのではないかと思うので、これは預からせていただきたい。ただ、即その答えを出さないと現実に効果的ではない。例えば、統括官、今日中にその対応を。

**【藤田政策統括官】**

そのように対応させていただく。

**【中村構成員】**

非常にたくさんのものをいただいて、少し始めているところだが、同じ分野の同じ関連のテーマがやはり複数出てきて、「これとこれは事前によく話をしておいてもらったら、もっといいシナリオになる」というものがある。もし一緒にできるならば一緒にしたらどうですかと、そういうことをこちらから、この選ばれた方に御提案するような時間的な余裕はあるのか。あるいはそういうことはできるのか。

**【相澤座長】**

同じような視点での御質問が前の会議にもあったが、今回、こういう形での公募形式をとったので、少なくともある審査段階までは、その操作はできないというのが一応のコンセンサス

ということ。最後の最後までできないかどうかは別であるが、今は第1段階のプロセス、それから第2段階もそういうアクションをかけるということは非常に難しい状況だと思う。その辺は、むしろできないというふうに考えたほうがよろしいのではないかと思う。

**【本庶座長代理】**

私の理解では、条件をつけての採択はあり得るという意見があったので、60か90のA、B、Cに分ける段階において、そういう形でやるということは可能ではないかと思っている。

**【相澤座長】**

それが、私が先ほど申しあげた、ある段階のところまでは無理ではないかということ。

**【中村構成員】**

よくわかった。

**【勝木構成員】**

先ほど申し上げたように、1,000が600になったというお話で、少しは楽になったというお話だが、600であっても大変難しい分量。各省庁と独立行政法人からの情報が得られたので、視点をいろいろ変えて見ながらすべてに当たってみたいと思っているが、そうであればあるほど非常に丁寧に見ないといけない。これだけよいシステムは、先に続けさせたいと私は思っているが、最初に荒いことをやると、国民の目から見ると拙速でやっつけ仕事でやったというふうに見られるのではないかと思っている。

それからもう一つ。いろいろな視点を今伺ったので、それに即して選ぶという作業をするが、やはり専門家の意見がとても重要。ここは十分に聞く必要があるだろうと思う。普通、私ども学術振興会でやっているのは、レビュアーを選ぶということだが、急いでもレビュアーを選ぶだけで1週間、了解を得てそれが返ってくるのでも2週間はかかる。それは状況が状況だから、少し短くすることはできるかもしれないが、なぜそういうことができないのか、なぜこの終わりを8月30日に決めてあるのかということに非常に疑問を持っている。これほどよいすばらしいシステムで、しかも、よいものを選ぶところが国民の目から見ても理解されるように、やはり十分時間をとるべきであると私は思います。

**【相澤座長】**

ただいまの御議論は、何度も出てきているわけだが、ステップを踏みつつここまで制度設計をしてきた。前回も議論したところ。そこで、諸条件の中にいろいろと工夫を仕込んで、レビュアーのプロセスはここからとか、そういうようなことをいろいろとやってきた集積であり、ワーキングチーム構成員の合意を得て進めてきているというふうには御理解いただきたい。

**【勝木構成員】**

現実に600件が出てきてみると、これは不可能だと思う。

#### 【相澤座長】

先ほど中西構成員からもあったように、今の作業プロセスで大きなネックになっているところで、多少それが緩和できるならば、そういうことは大いに工夫していくということ。これはこの全体のプログラムを推進するところの大枠の問題でございますので、統括官からそこに一言御発言を。

#### 【藤田政策統括官】

私のほうから、事務局の審査期間についての基本的な考え方について、お話をさせていただきたい。このプログラムについては、5年間の時限のプログラムとなっている。基金についても、法律上、26年3月末までが基金の存続期間である。そして、このプログラムにおいては、中心研究者と研究課題をまず決めるという作業がある。今、これをワーキングチームの方々にお願いしているわけだが、これが決まったからといって、お金を交付できるわけではない。この後に、その中心研究者をサポートする研究支援機関を公募し、そして、より一番よいサポート体制のところを研究支援機関に決める。それを中心研究者が指名するという作業がある。これも、はっきり言って2カ月なり2カ月半なり、ぎりぎり、最低限でもかかるのではないかというふうに思っている。そういうふうに考えると、実際に研究資金が交付されて研究がスタートできるというのは、少なくとも11月とか、そういったタイミングに、早くてもなってしまうのではないかというふうに思っている。先ほど申し上げた5年間の時限プログラムということから考えれば、選定に時間をかければかけるほど、研究をやっていただけの時間が短くなるということ。私どもとしては、審査については拙速であってはならないというふうに思っているが、その中でもできる限り急いでその審査等をやっただき、資金の交付を行っていただき、研究者が研究に専念できる、従事できる期間をできるだけ長くとっていただく。それが、研究成果をきちんと上げるために必要だというふうに考えているところ。それから、ヒアリングについても、前回、前々回のこのワーキングチームで日程をセットしていただき、ワーキングチームの構成員の方々、大変お忙しい中ではございますけれども、17日から21日までフルに時間をとっていただいているという事情もある。また、応募者の方にも、そのころにヒアリングがあるというのも御連絡しているところであり、そういった諸事情等を勘案していただき、私どもとしては、8月末までにワーキングチームとして一定の数に絞り込んでいただくということを、できればお願いしたいというふうに思っているところである。

#### 【勝木構成員】

そのプロセス、日程の中で、一番重要なのはどこですか。つまり、中心研究者を選ぶところではないか。やはり、そのために分野を問わずに、ここはワーキングチームとして選ばれてきており、私も本来はライフサイエンス中心ではあるが、そういう分野を選ばずにやっているということがある。やはり専門家のレビューを入れるということはとても大事なことで、そのためには、後から入ったことだが、それを重要視すべきではないかと私は思う。そういうことを抜きにして、日程が11月から始めるためにはそうだとおっしゃるけれども、600来ということから想定していなかったのかもしれないし、これが100だったらできていたのかもしれないが、600ということは本当に難しいこと。ですから、そのところは配慮して

いただきたいことと、それからやはり額が大きいですから、よほど精査してやらないといけない。「選考過程をおろそかにした」という大変な批判を招きかねないと私は思うので、ここはぜひ再考していただきたい。

#### 【相澤座長】

先ほどから申し上げているように、この仕組みづくりは皆様の合意の下で行ってきたということであり、このプロセスの内容についても構成員の御意見で構築されてきている。ここで問題になっているのは、日程の非常に厳しい条件で、これを構成員から出てきた御意見をもとにつくられた仕組みとどうマッチさせるかという具体的などころ。それについても今までのように合意を得た上で進めてきているので、これ自体をもって拙速ということにはならないように、どうやって実現するかということが課されている。そこで、600件になったから修正しなければいけない問題と、根本的などころについては今まで合意を形成してきてつくられたものだというので、切り分けて御理解いただきたい。もう審査のプロセスに入っているなので、先ほどの中西構成員のように具体的な作業プロセスとして、何とかこれを実効的なものにするのに工夫し得ることがあるならば、ここで出していただきたい。

#### 【橋本構成員】

私が今やっていることで申し上げますと、こういうことは想定されていたのである程度イメージしていたが、やはり一番大変なのは中西委員が言われたように理由を書くところ。私は5つにしているが、10個にしたほうがよいかもしれないけれども、典型的な理由というのは大体決まっているので、それをどんどん入れていくようにしている。ただ、それを事務局でつくと非常にパターン化するため、各構成員が自分たちでやる必要がある。それから外れる理由のものは別途書かないといけないが、大体8割から9割はそのパターン化したものにおさまる。一つの方法として提供させていただく。

#### 【西尾構成員】

第三者からの参考意見聴取というところで、やはり参考意見といえども、場合によってはそれなりに重視する可能性がある。そういう意味で、事務局の方のお願いであるが、今予定されている短い期間で参考意見聴取ができる準備を今から万全に整えていただきたい。つまり、どの分野のどういう人に査読をお願いするかとか、というようなことに関して可能な限りの準備をしていただきたい。

#### 【石谷構成員】

最初にお話があったかもしれないが、100件について、名前は覚えていないが要審査とかというのがあった。あの2つは全く採点上は差がないのか、それとも差をつけられるのか。それともう一つ、先ほど議論のあった理由については、もうこれは自分なりに書くしかないと思っている。それがパターンにはまるかどうかは結果として自然にそうなると思う。この理由は、ほかの方の審査の理由と全く違うかもしれないが、これはもう認めていただくしかないと思っている。

【相澤座長】

それでは、事務局から。

【二村参事官】

この優良と要精査は、前回説明したように、必ずこれを通すべきものを「優良」、それより劣るが次のステージに持っていくべきものを「要精査」として丸をつけていただきたい。ただし、この段階では、それぞれの丸の取り扱いは同等とする。

【金澤構成員】

先ほどから、いろいろ御議論があるわけだが、実際にこの提案が出てきてから考えると、いろいろ勝木先生がおっしゃるような御心配もあるし、さっき小野理事長が言われたようなことも、私もやはり気になっている。何とか協力してやっていこうとは思っているけれども、今言えることは、多分、西尾さんがおっしゃったことではないかという気がする。つまり、例えば先ほどから太陽光などという話があるが、あれだけでも12件ぐらいある。だからそれをどう判断するかというのは大変難しい。一般的にそのテーマが大事だということはわかるが、これは後々にヒアリングに残る、残らないはともかくとして、やはり専門家の意見を複数できれば聞いておきたいという思いは拭い去れない。ですから、この準備は必ずやっていただきたい。そういう過程で延びてしまうのは、これはやむを得ないんじゃないかと実は思っている。

【本庶座長代理】

私も昨日、大分一生懸命やった。それでわかったことは、自分の専門分野はやれるということ。しかし、専門外のところは、読むのに物すごく時間がかかる。理解しながら、つまり、字面だけ読んでも意味がないわけで、したがって、このままこの時間で私がやるとすれば、私がやることは専門分野外でちょっとおもしろそうなものを何件かピックアップする。そのほかは、自分がわかるところからピックアップするという形にならざるを得ない。ほかはちょっと、ページをめくるだけで大分時間がかかるから、現実問題としてそういう形にならざるを得ない。

すると、期間を延ばすか、あるいは西尾先生がおっしゃったように、300件にメールレビューを出すのと、600件にメールレビューを出すのと大して変わらないわけですから、全部、今からすぐ出すということを考えてもよいのではないか。

【相澤座長】

ただいまの御意見もむしろプロセスの問題であり、このプロセスについては合意して、こういう仕組みでいくということになっているので、ここについてはもう御了解ずみとさせていただきたい。ただいまいただいた具体的なプロセスの中で工夫し得ること、これについては今日中に、事務局のほうで御意見を反映できるようにまとめて、即、各構成員に出していただきたい。万全を期すということは、大変難しいことであり、今やり得る範囲のぎりぎりのところということでお願いしたい。それでは、事務局から何かあれば。

【二村参事官】

先ほど指摘された、全件をもしチェックしていただけない場合については、前回の資料1にあるように、構成員には原則としてすべてを審査していただくということになっており、もしすべてを見ていただけない場合には、事務局に連絡いただくことになっているので、もしすべてを見ていただけない場合には、事務局に「ここまで見ます」とか「件数は何件です」との情報をお送りいただきたい。前回の資料には記載があるところ、念のため、もう一度申し上げた。

【勝木構成員】

でも、それは根本的に変わったことではない。全部を見るということでこの日程は組まれている。さっき石谷先生がおっしゃったようなことはあるかもしれないが、専門分野を皆さん網羅しているわけではないから全部を見ようということのはず。

【相澤座長】

今、事務局が申し上げたことは、恐らく……

【勝木構成員】

読めなければ、読む時間をいただきたい。それ以外で、読めないようだったら、読めないものは読めないと出してくださいというのは変。

【相澤座長】

あくまでも、私が先ほど石谷構成員に説明したようなことが趣旨であり、ある部分について棄権するということがあった場合には、その旨を記しておいてほしいという意味。原則はあくまでも全部を見るということ。

【石谷構成員】

もちろん最善を尽くしてやる。間違った判断をするのは避けたいが、これは後になってみないとわからない。あらかじめこれは逃げようなどということは考えていない。そうすると、最後に「これは判断が付きませんでした」という形で提出させていただいてよいか。

【相澤座長】

棄権されたということ、きちんとわかるように記しておいていただきたい。

【中村構成員】

テクニカルなことで、多分、いろいろな方にも関係することだと思う。利害関係者は申し出ることとなっており、例えば大学であれば同じ学部とかと書いてあるが、それはもう見ていけばわかるので、何か表に書き込むのでよいか。これを全部ピックアップして、また表にしてというのは、少し大変なので。

【二村参事官】

結構です。

**【相澤座長】**

それでは、とにかく大変なことをお願いしていることであり、以上のように工夫し得る範囲のところは、本日中にお答えできるようにさせていただきたい。次回のワーキングチームの予定は、8月11日火曜日、午前9時30分から。本日の資料と議事概要は公表させていただく。それでは、本日のワーキングチームはこれで終了させていただく。

(了)